研修記録

尾高知の峯は雨にけぶりて

― 佐伯惟治の遺跡を巡る ―（九月二十日決行）

（挿入の俳句 長良ハ会員吉田雅雄氏）

天気予報は悪くはない。曇ってはいるが雨は降っていない。五月の予定日は雨で流れての今日である。尾高知山にも登れるとふんで決行ときまりバスを出したが、国道十号線は仁田原の谷でポツリポツリ、重岡から三本の谷を下るころ雨は late 々はげしくなる。今日の眼目、惟治公終焉の地尾高知の峯は駄目である。一行は二十一名。

茜葉から三川内の谷に入る。道路改修中でドロンコの路をバスはゆれながら峠を越して古江に向こう。

秋霖ホ尾高知の峯に霧こめて
早やばやと早期刈田のうちつづき

古江では尾高知神社の宮司木原義邦氏を訪い、招ぜられるままにお座敷にあがり、惟治公の着用されたと伝えられる小袖（或は直垂か）の残欠と紐を先ず見せていただく。

秋雨や遺品小袖は市の宿　長良子

秋雨や白衣衣桁に弥宜館　同

尾高知の峯に於ける惟治公の御最期、その後につづく数々の災厄、これを怨霊の祟りなりとして畏れまつったのが先づ市振、直海、それからここ古江、そして三川内の梅木と――この北浦村がどうも発祥らしい。木原氏は「北浦村史」に執筆された数々の文献をあげてお話し下さる。私共は尾高知山に登れないかわりに、一時間近くいろいろお尋ねしたり、お話に耳をかたむける。

道をはさんですぐ上に尾高知神社がある。社はおまり大きくない・途中の地下神社には惟治公を合祀してあり直海、市振と共に四社、隣りの南浦村（今の阿久根市）に一社、それに梅木と北川村長井に一社で、日向六社が一応はつきそうなことになる。然し佐伯十社も小さな社までかえるとまだ多いようである。今後も心がけてメモしようが、いずれにしても、御土の人個人では他に比類がない。

イヤザメの入口、大型車を避めて北川村の中井村長さんが待ち受けていなさる。きくれば今朝八時すぎから国道京太郎ドライブインで待っていて下さったどのこと。あかえなかったとは言え素通りして全く申訳けない二度である。幸い座席のゆとりがあるので同乗して後く。

すぐ車内マイクを手にされて北浦村三川内の御紫内。古江などの沿海部と梅木を中心とする叢山村部で構成されている北浦村の事情を、次々と車窓に展開する景観に応じてお話し下さる。

正午十分頃ご前に梅木に着き、先ず光久寺に行く。益田先生が来てお出でで、住職の方から示された文献を写していられる。このお寺は尾高知の峯にある惟治公の廟を守られ、惟治公の御位牌寺である。

惟治の霊まつるはや香たきて

御位牌を正面須弥壇の前に立て、住職並に若松師による読経がしばらくつづき、そして全会員次々に焼香して拝礼する。両に祟られた今日、ここで惟治公の御位牌をまつり得ることは何よりである。然し五年前拝した時よりは気のせいか一層位牌は古びて「章徳院殿前薩州刺史従正徳大禅定門」の文字もおぼろである。

過去帳も拝見する。「大永七丁亥秋七月廿五日」である。尾高智堂は当寺の末庵で神社ではなくて廟である

ここでお茶をいただいて中食、少憩の後辞して程遠からぬ川べりの鵜戸神社に参拝する。社頭に次の石碑が建っている。

鵜戸神社移転記念

古鵜戸大権現勧請之由緒　豊後国佐伯五萬石之領主大神佐伯惟治ト申御人先年豊後国之領主大友氏ト及ビ戦場有破戦　当地エ御落被成候延文友家ヨリ御討手向御亡被成候由ニ御座候　梅木村ニ天文二癸

已年奉勧請

（宮主、宮司の氏名あるも省く）

佐伯の我々にとっては「佐伯の次郎惟治」という呼び方、死後の七月などと共にいただきかねるところがあるが、当地の伝承として心に留めておこう。

再び車に乗って北川村に向こう。案内役の中井村長氏は北川の村政を担当し、今は道路改修ととり組んでいられるが、去る昭和四十一年の北川の大洪水のお話は生々しい現代史として私共の心を捉える。佐伯とは隣村同志であるのにこの水害の話は生々しい。

秋なれや樹林わずかに色づきて

車は市街から瀬口に入る。雨がきっぱりに降る。

柿おちてすゆる匂ひや塔の道

お塔さまは小さな谷間にひそやかにある。お堂がせまいのですぐ一ぱいになり、何人かは堂の外から拝する。燈明台にあかあかと灯が悲せられ、若い師の読経があり、ここでも私共は悲運の城主の冥福をとむらうことが出来た。

新しき堂を秋霖暗うする　　長良子

秋霖にお堂の裏の塔ぬれて

このお塔さまについては前号にその由来記を載せてあるので重複をさけたい。お頭神社と呼んでいるが厳密に言えば惟治公の首級を葬った首塚であり、長ろく盲僧によって祭りつがれて来た廟である。正面にまつってある三基の墓塔から推して、字を宛てれば「お塔さま」であろう。（佐伯下堅田の西野の惟治父子のお墓所は「お塔」と呼ばれている。然し土地の人達が神社と呼ぶことを否定するものではない）

去る七月このお塔さまの改築を成しとげ、これまでもこれからもまつりつづけ守りつづけている瀬口老人クラブの方々は、一行を小学校裏手の促童館に招じて、歓迎且つ慰労の茶菓のおもてなしである。梅木の光久寺でも話した惟治公の位牌まつり、佐伯氏の菩提所である龍護寺で、十一月の下旬に営んだいのでその節は案内するのでお出でありたいとお伝えし、ジュース、焼酎の振舞まであって賑やかな交歓の時をすごす。

日程が早く進んだので中井村長氏の御案内に甘えて、瀬口を後に市街から国道を熊田、長井と保野まで南下する。

秋霖や可愛岳の峡けぶりたる　　長良子

中井村長氏は車を駐めて、霧に半ばかくれた可愛岳を御指さし、ザレの越と指さして、西郷隆盛の薩軍が官軍の重囲を突破して、三田井、米良と霧島に敗走した西南戦役を物語る。

古戦場の跡とや峡の秋の田も　　長良子

その西郷隆盛が宿営した促玉家を訪い、西南役関係資料など拝見する。雨は幸いに小止みとなる。

すぐ裏山に当る瓊々杵尊御陵墓との伝承の出る古墳にまいる。円墳には植えたのか自然に生えたのか、数十本の松が亭々とそびえている。御陵墓参考地として境内もひろくとられて玉垣をめぐらし、今も宮内庁の管轄のもとにあり、廣々としてなかなか立派である。

山陵の冬道埋め秋の草　　長良子

雨おやみ可愛山陵に露しげく

これで今日の日程は終った。長井で中井村長氏に全員より口々にお礼を申し上げてお別れし、車は一路国道十号線を北上、五時四十分ごろ佐伯に帰着した。尾高知山に登れなかったのは残念であり、雨にわざわいされたが、先ずは収穫の多い現地探訪であった。（文責 柴幹事）